

琉球大学学術リポジトリ

[原著] 口底と肺にみられた重複癌の1例

メタデータ	言語: 出版者: 琉球医学会 公開日: 2010-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): cancer of the floor of mouth, cancer of the lung, double cancers 作成者: 砂川, 元, 山城, 正宏, 新崎, 章, 喜舎場, 学, 津波古, 判, 我那覇, 宗教, 津波古, 京子, 大城, 智, 川畑, 勉, 鎌田, 義彦, 草場, 昭, 中村, 浩明, 斎藤, 厚, Sunakawa, Hajime, Yamashiro, Masahiro, Arasaki, Akira, Kishaba, Manabu, Tsuhako, Wakatsu, Ganaha, Munenori, Tsuhako, Kyoko, Oshiro, Satoshi, Kawabata, Tsutomu, Kamada, Yoshihiko, Kusaba, Akira, Nakamura, Hiroaki, Saito, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015936

口底と肺にみられた重複癌の1例

砂川 元、山城正宏、新崎 章、喜舎場 学、津波古 判
我那覇宗教、津波古京子、大城 智、川畑 勉*
鎌田義彦*、草場 昭*、中村浩明**、斎藤 厚**

琉球大学医学部歯科口腔外科学講座

*琉球大学医学部外科学第二講座

**琉球大学医学部内科学第一講座

(1994年5月18日受付、1994年6月21日受理)

A Case of Double Cancers in the Floor of Mouth and Lung

Hajime Sunakawa, Masahiro Yamashiro, Akira Arasaki, Manabu Kishaba,
Wakatsu Tsuhako, Munenori Ganaha, Kyoko Tsuhako, Satoshi Oshiro,
Tsutomu Kawabata*, Yoshihiko Kamada*, Akira Kusaba*,
Hiroaki Nakamura** and Atsushi Saito**

*Department of Oral Surgery, Faculty of Medicine, *Second Department of Surgery, Faculty of Medicine and
** First Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, University of the Ryukyus*

ABSTRACT

Recently, the incidence of double cancers tend to be on the increase, as the survival period of cancer patients lengthen. A case of double cancer in the floor of the mouth and lung is reported. The patient, a 63-year-old man, had squamous cell carcinoma in the floor of the mouth and a subsequent adenocarcinoma in the lung. The extent of the operation on the carcinoma of the floor of the mouth was based on the clinico-pathological malignancy grade and the response to induction chemotherapy. The primary lung cancer was discovered at an early stage, during the follow up on the oral cancer, and optimal resection of the tumor was carried out. The patient was responding well to treatment. The possibility of the development of multiple malignant tumors must be kept in mind when treating malignancies. *Ryukyu Med. J., 14(3)203~207, 1994*

Key words : cancer of the floor of mouth, cancer of the lung, double cancers

緒 言

近年、悪性腫瘍に対する治療成績の向上や平均寿命の延長にともない、重複癌の発生率が増加している¹⁻⁸⁾。今回われわれは、口底癌の術後経過観察中、定期的に行っている胸部X線写真による検索で、早期肺癌を発

見し、外科的切除により良好な結果を得た症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：63歳、男性

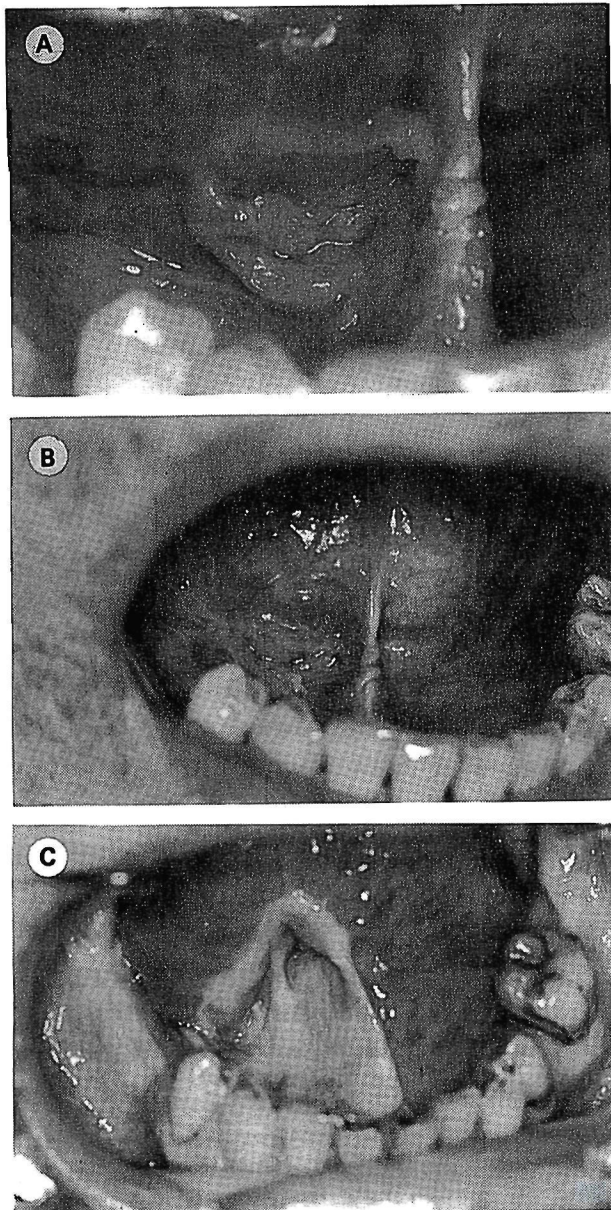


Fig. 1 Carcinoma of the floor of the mouth shows granular type at the first visit (A), the reduced tumor after chemotherapy (B), the oral finding after operation (C).

初診：昭和63年10月27日

主訴：口底部の疼痛

家族歴：特記すべき事項なし

既往歴：昭和55年、肺結核で1年間通院加療を受けている。

現病歴：昭和63年6月、摂食時に右側口底部の刺激痛を自覚するも約1ヵ月ほど放置していた。その後、同症状に変化が認められないため、近医耳鼻科を受診したが、消炎療法を受けただけで症状の改善は得られなかった。しかし、依然として刺激痛が持続するため、

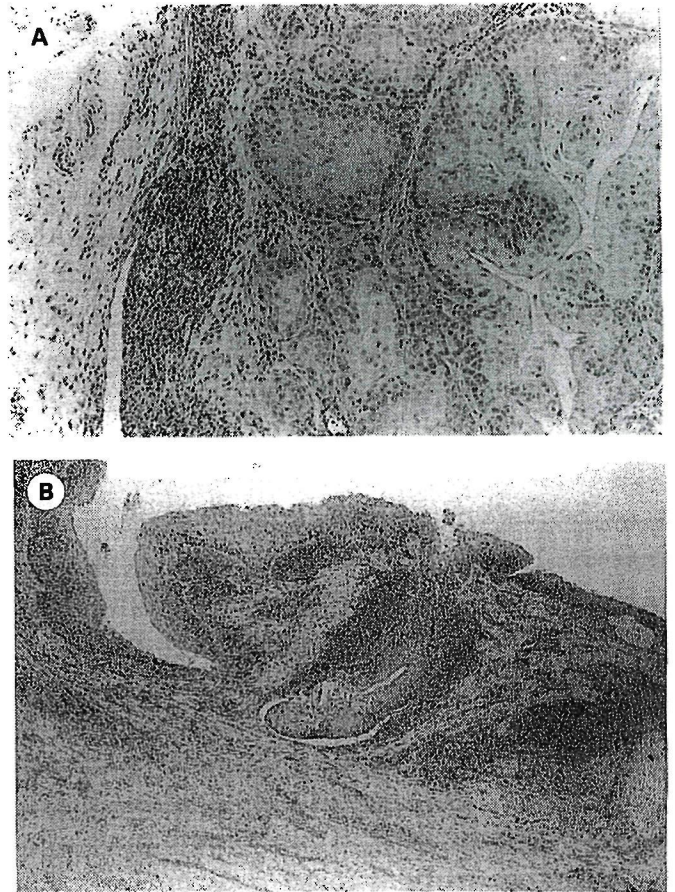


Fig. 2 Histological appearance of the squamous cell carcinoma in the biopsy specimen (A:H-E, $\times 25$), and in the resected tumor specimen (B:H-E, $\times 10$).

知人である開業医師に相談したところ当科を紹介され、来科した。

現症：全身所見は体格・栄養状態ともに中等度で、特に異常は認められない。

口腔外所見としての顔貌には、特記すべき事項はない。

口腔内所見では、右側口底部に21×10mm大の肉芽型腫瘤を認め、腫瘤の周囲は堤防状に隆起し、硬結を触知した (Fig. 1A)。

顎下リンパ節および頸部リンパ節ともに触知されなかった。

臨床診断：口底部悪性腫瘍 (T2N0M0)

生検による病理組織学的診断：中等度分化型扁平上皮癌で、細胞異型度Ⅱ、単核細胞浸潤強、癌細胞分裂数多、癌細胞浸潤様式は3型であった (Fig. 2A)。

処置および経過：病理組織学的確定診断を得た後の昭和63年11月9日当科に入院。Induction chemotherapyとしてBleomycin 60mg、OK-432 26KEを投与したところ化学療法効果は有効であった (Fig. 1B)。同年

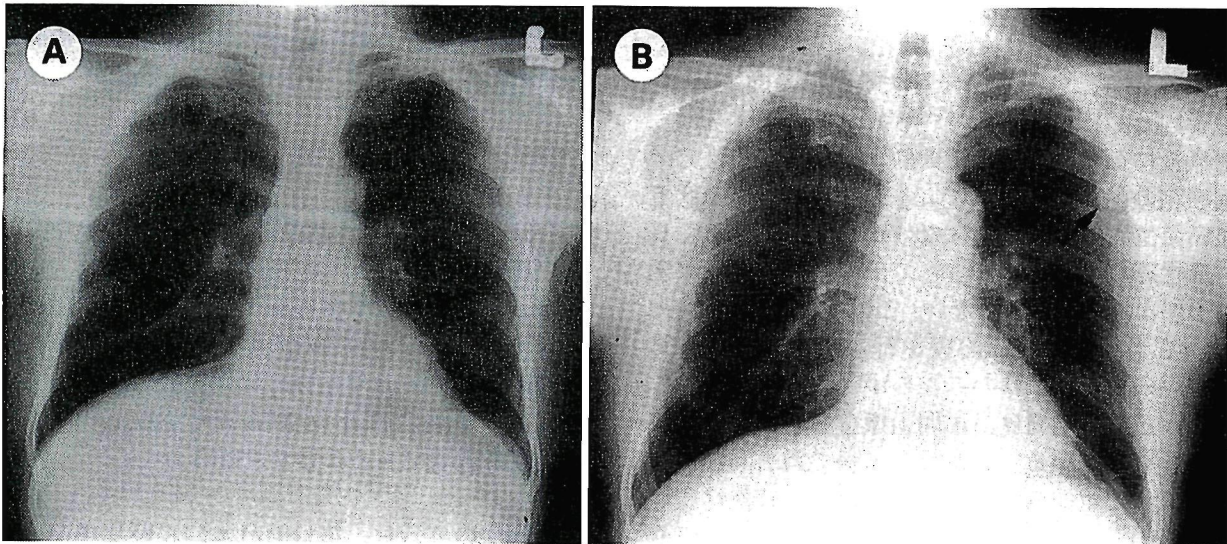


Fig. 3 X-ray finding of the lung at the time of oral cancer resection (A), at the time of discovery of the coin lesion (B:→).

12月7日全麻下に口底・舌部分切除術を施行し、同時に腫瘍切除時に舌下小丘が含まれるため、便宜的に両側上頸部郭清術を併用した。なお、腫瘍の切除創面には、舌の可動性を温存する目的で大腿部からの遊離皮膚移植を行った。手術時の腫瘍切除物から作製した連続切片標本所見では、化学療法効果が認められ、Shimosatoらの分類のGradeⅢと判定された (Fig. 2B)。

術後は、外来において定期的に視診、触診による局所と頸部の経過観察を行い、同時に胸部X線撮影とCT撮影による局所再発や頸部ならびに遠隔転移の早期発見に努めていた。術後3年8ヵ月経過した平成4年5月12日の時点では局所再発や頸部の後発転移などの所見は認められず、移植皮膚も生着し (Fig. 1C)、とくに機能障害や局所の症状などを訴えることはなかった。しかし、原発巣切除時に撮影した胸部X線写真 (Fig. 3A) に異常所見は認められなかったが、同日撮影した胸部X線写真において左上肺野に、辺縁明瞭な coin lesion を認めた (Fig. 3B) ので、本院第1内科を紹介した。同内科では、患者が結核の既往歴を有していたことから、結核に対する諸検査を行うも異常所見は認められなかった。そこで口腔癌の既往があることや胸部X線所見から、肺転移を含めた悪性腫瘍が強く疑われ、平成4年8月19日、本院第2外科において全麻下に開胸による術中迅速病理検査を行った。その結果、adenocarcinomaの病理組織学的診断を得たため、引き続いて直ちに左肺上葉切除術が施行された。同切除腫瘍の病理組織学的所見はmoderately differentiated adenocarcinoma, papillary type (Fig. 4) であった。口底癌の術後は5年4ヵ月、肺癌の術後は1年8ヵ月経過しているが、とくに再発など異常なく社会復帰している。

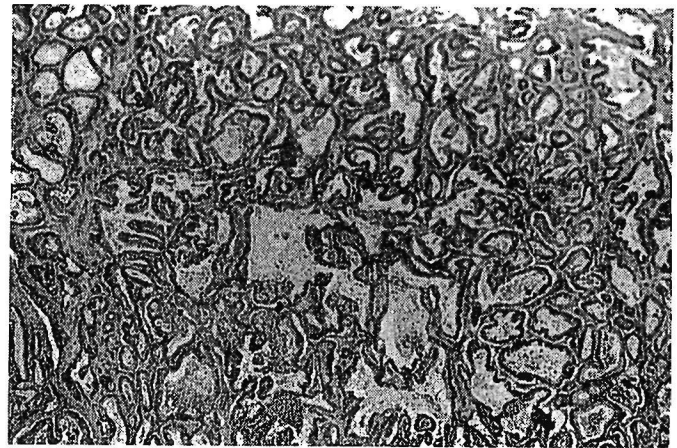


Fig. 4 Histological appearance in the lung cancer specimen (H-E, ×25).

今後とも当科および第二外科において厳重な経過観察を行う予定である。

考 察

今回われわれは、口底の扁平上皮癌と肺の腺癌で、それぞれ部位と組織型の異なる原発性悪性腫瘍が発生し、Warren & Gates¹⁰⁾により提唱された重複癌の定義を満たす症例を経験し、報告したので、その概要について考察する。

近年、一次癌としての悪性腫瘍に対する治療成績の向上にともない、一次癌の経過中に二次癌、三次癌などの重複癌症例が数多く報告されるようになってきた¹¹⁾。その原因として平均寿命の延長にともなう高齢化、

各種大気汚染、喫煙、食品添加物などの化学物質への曝露の危険性の増大などの影響⁹⁾や診断機器の進歩、経過観察の充実、患者の癌に対する認識の向上など¹⁰⁾がその要因として挙げられている。さらに著者らは一次癌治療後に行われている補助的維持化学療法として各種制癌剤の長期連続投与による患者の免疫能の低下も重複癌発生原因の一つではないかと考えている。しかし、進行癌などの症例によっては、術後の維持化学療法が必要な場合も少なくない。このような観点から、われわれも当科で口腔癌治療を行った症例に対しては、口腔癌の再発や転移のみならず、各種臓器に対する二次癌などの早期発見、早期治療を心がけて厳重な経過観察を続けている。しかし、当科で過去6年4ヵ月間に経験した重複癌症例は、この間の口腔悪性腫瘍170例中13例（一次癌としての口腔癌7例、二次癌としての口腔癌6例）に認められた。これら13例の重複癌症例中予後不良例は5例であり、4例が二次癌の非制御例であった¹¹⁾。このように重複癌における予後は二次癌の治療成績に左右されることが多いようである⁷⁻⁹⁾。これらの結果から、癌患者は一次癌治療によって全身的にさまざまな影響を受けて免疫能の低下をきたしている可能性があり、このことが二次癌の治療を困難にし、予後不良になっている原因ではないかと推測された。現在当科では、口腔癌患者の術後にOK-432の投与による免疫化学療法を行っているが、その効果のほどは明らかではなく、癌患者の免疫能を賦活する治療方法を考慮することが今後の課題であると考えられた。

一方、口腔癌の遠隔転移は血行性転移による肺転移が多いとされている¹²⁾が、われわれの経験ではいずれも進行癌症例や末期癌症例にその頻度は高いようである。しかし、口腔癌の術後における経過観察のなかで、肺転移の早期発見は重要であるが、その制御は困難とされてきた。その理由として、恐らく原発巣の制御が明らかでない状況において肺転移巣に対する治療が積極的に行われなかったことが一つの要因ではないかと考えられた。本症例では、肺結核の既往はあるものの、口底癌手術後約3年8ヵ月経過後に、定期的に行っている胸部X線写真から肺転移が疑われた。しかし、一次癌治療後比較的長期にわたり原発巣が制御されていることが、肺転移を含めた胸部の検索を積極的に行われしめ、早期診断が得られたものと考えられる。その結果、原発性早期肺癌の病期で左肺上葉切除術が行われたことが良好な経過を得たものと思われた。このように口腔癌の遠隔転移は肺に多いこと、さらに早乙女ら³⁾、宮原ら⁶⁾の報告のごとく頭頸部領域内の重複あるいは消化器系、呼吸器系との重複頻度が高いとされていることから、今後は肺転移や原発性肺癌ならびに他領

域の二次癌の早期発見のために、厳重な経過観察とともに関連各科との緊密な連携を計ることも重要であると思われた。

結 論

今回われわれは、口底癌の術後経過観察中に早期肺癌（重複癌）を発見し、良好な結果を得た。口腔癌患者のさらなる治療成績の向上を図るためには、口腔癌に対する一次治療のみならず、術後の厳重な長期的経過観察による再発や転移の早期発見も大切であるが、今後は多重癌の報告⁴⁾もあることから、二次癌に対する検索も重要であることが示唆された。

本論文の要旨は、第11回日本口腔腫瘍学会総会（平成5年1月、新潟市）において報告した。

文 献

- 1) 関川和男, 菅野重光, 山田和祐, 田代直也, 菊地正明, 川村 仁, 丸茂一郎, 林 進武, 大久保勉, 山本 肇: 下顎歯肉と膀胱にみられた重複癌の1例. 日口外誌 29:1277-1280, 1983.
- 2) 西村泰一, 末次博史, 松田光悦, 津山 建, 池畑正宏, 北 進一: 肺と下顎歯肉にみられた重複癌の1例. 日口外誌 31:1523-1526, 1985.
- 3) 早乙女 均, 藤田訓也, 重松可明, 斎藤一彦, 鈴木正二, 若林一夫, 内海順夫: 口底と肝臓の重複癌の1症例ならびに本邦頭頸部領域重複癌の統計的観察. 日口外誌 33:2504-2511, 1987.
- 4) 田口 齊, 橋本 温, 谷岡博昭: 四重癌の一剖検例. 口腔腫瘍 4:295-298, 1992.
- 5) 瀧田正亮, 谷口文章, 林 雨増, 墨 哲郎, 大前政利, 町谷卓男, 川本知明, 奥西泰子, 作田正義: 頭頸部悪性腫瘍における重複癌症例の検討. 日口外誌 36:1320-1326, 1990.
- 6) 宮原 裕, 佐藤武男, 吉野邦俊, 馬谷克則, 鶴田至宏: 頭頸部癌における重複癌の実態と治療. 癌の臨床 36:2529-2533, 1990.
- 7) 浦出雅裕, 美馬孝至, 古澤栄之, 白砂兼光, 松矢篤三: 当科における重複癌症例の臨床統計. 日口外誌 36:2527-2530, 1990.
- 8) 鹿嶋光司, 有馬良治, 伊保木幹生, 迫田隅男, 芝良祐: 頭頸部癌患者における重複癌の検討. 口科誌 42:316-323, 1993.
- 9) Shimosato, Y., Oboshi, S., and Baba, K.: Histological evaluation of effects of radiotherapy and chemotherapy for carcinoma. Japan J. Clin. Oncol.

- 1: 19-35, 1971.
- 10) Warren, S., and Gates, O.: Multiple primary malignant tumors, A survey of the literature and a statistical study. Amer. J. Cancer 16: 1358- 1414, 1932.
- 11) 大城 智, 山城正宏, 砂川 元, 金城 孝, 新崎 章, 津波古 判, 喜舎場学, 我那覇宗教, 仲宗根 康雄: 当科における重複癌の臨床統計的観察(会). 日口外誌 37:2349-2350, 1991.
- 12) 小守 昭, 森 勝好, 山田直之, 石川 梧朗: 剖検例よりみた顎口腔領域悪性腫瘍の遠隔転移について(第1報). 口科誌 24:287-297, 1975.